

思い出を美しく残す技術力 日々進化する技術を用いて技能の本質を表現

7-40 有限会社スタジオ オノエ

学生時代の思い出を一生の思い出に

オノエは、兵庫県明石市に本社を構える写真撮影・デジタル映像処理を中心とした写真業を営む企業である。

社長の尾上潤二氏は、1972年に同社を創業した。現在は本店と駅前の2つの店舗を構える。売上の約7割は卒業アルバム等の学校関連となっている。尾上氏は「世の中が過ぎすぎてきているので、思い出を残すお手伝いをしたいのです。」と経営方針の一端を語ってくれた。

同社の特徴は、手がけられた卒業アルバムを紐解くと見えてくる。一般的な卒業アルバムは、校長先生の挨拶、教員紹介、生徒の顔写真、行事の写真という構成が多いが、同社のアルバムは起承転結に基づくストーリー仕立てで構成される。合格発表から始まり、入学時、1年生から3年生までの行事の流れ、卒業時という流れである。また、起承転結間の中扉には、四季の写真を入れている。

「春夏秋冬を通し、同じ学校でも季節が変わったら見え方が違います。季節の変わり目を学校に出向いて撮っていました。入道雲がでてきたら、すぐさま入道雲を取りに行くなど徹底的に拘っています。」と尾上氏は語る。「一生の思い出として、歳を重ねても常に振り返りたくなるアルバムにしたいですね。」同社のこだわりが伝わってくる。同社のアルバムは、多くの賞を勝ち取った。



同社の製作するアルバム

環境変化に合わせ最高の結果を出すための手段

同社の技能士は尾上社長自身であり、一級写真技能士である。尾上氏は、技能検定の意義について、「写真業界を取り巻く環境は、デジタル化に代表されるように日々刻々と変化しています。技能検定とは、日々更新されるデジタル技術などの激しい変化の中で、本質を見失わずに環境変化に適応するための土台の中の土台です。機器やツールが変化しても、変化に合わせてよいアウトプッ

トを出すための原理原則を学ぶためにあります。」と語る。尾上氏は「技術的進歩は本当に目覚ましい。ただし、技能とはモノの見方、撮るノウハウのことを意味していて、技術が変わっても技能は変わらない部分です。」と言う。モノの見方とは、被写体を見る見方のことである。例えば、光と影をどのように捉えるか。これは技能者個人の腕に宿るノウハウである。技術がいくら進歩しても技能の重要性は変わらないということだろう。尾上氏自身は技能者であるが「時代に応じて技術は進歩するものであり、技能者であっても技術的な最先端には常にキャッチアップしておかなければならないと思っています。本質を、道具を変えても表現できなければならないのです。最もよいものを、本質を見失わず、最先端の技術を用いて表現できなければならないと思います。」と言う。技能によって捉えられた本質を、最先端の技術でよりよく表現する。技術とうまく付き合う技能士の哲学が感じられる。

技能士であることが受注の際の差別化に貢献

同社では技能士がいることによって、顧客に安心感、信頼感を感じてもらえ、営業につながっている。さらに、1級技能士だけで競われる第25回技能グランプリ(2009年)写真部門において優勝しており、グランプリ優勝者のいる企業という差別化につながっている。

マンツーマンで技能士を徹底指導

同社が求める人材像は、「最高の質のアウトプットを、デジタル化された機器を用いて表現できる人材。」である。尾上氏は、「デジタル化されてから、例えば修正1つとってみても簡単にできるようになった反面、不適切な修正が増えています。修正は口元の微笑みをきれいにするのが基本で、筋肉にそって修正してあげるとトーンがそろろう。その基本を知らずに修正してしまうと不自然になってしまいます。」と語る。尾上氏は社員に徹底的に技能の基本をマンツーマン方式で指導している。

有限会社 スタジオ オノエ

➤業種:写真現像・焼付業
➤住所:兵庫県明石市
➤代表者:尾上 潤二

➤設立:昭和47年
➤従業員:7名
➤技能士:2名(延べ人数)

技能士へのインタビュー

尾上 潤二氏（60 歳） 1 級写真技能士



卒業直後に起業

有限会社オノエの社長である尾上氏に、ご自身について伺った。

尾上氏は、日本大学芸術学部で写真映像全般について学び、同学卒業直後に創業した。写真家としての技能を現場で磨き、昭和 61 年には 1 級写真技能士となり、第 25 回技能グランプリ写真部門において優勝を果たした。



グランプリの優勝写真

お客さまの歴史の証人になることが喜び

技能の魅力について、尾上氏は「写真家として、一人一人のお客様にとっての『今まさにこの時』を残してあげたいと思っています。写真を見れば、その時のイメージがたくさん湧いてくるような写真を撮ってあげたい。そして、『できるだけ良い写り』で残してあげたい。技能とは、その目的を達成するために欠かせないものです。」という。尾上氏は、自分の技能の高さを世に認めてもらいたい、という思いはあまりないという。それよりも、お客様に最高の喜びを感じてもらいたい、そのための手段として欠かせないのが技能なのである。尾上氏は、徹底的にお客様満足を追求するために、これからも技能を磨き続ける。

スタジオオノエで毎年家族写真を撮影する顧客の例を尾上氏が次のように語ってくれた。「毎年家族写真を撮りに来られるが、家族全員が毎回同じ服装だったことに最近気がつきました。理由を聞くと、『私たち家族の歴史を残しておきたい。同じ服装であれば歴史の変化がよりよく分かる。』ということでした。お客様の歴史を残すことのお手伝いができていることに非常に大きな喜びを感じます。」

尾上氏は、自分自身の写真がお客様の歴史の証人となっていること、そしてその歴史が「素敵なもの」に演出されていること、そのことにお客様が満足していること、この事実言葉にできない誇りを感じている。

日進月歩の技術革新に追いつくための手段

尾上氏にとって、技能検定に合格してよかった点は、「デジタル化に代表される業界での著しい技術進歩において原理原則、本質を見失わないための土台中の土台が確立できるというのが第 1 のメリットです。もう 1 つは、営業がしやすくなるというメリットがあります。職人は技能レベルは高いがその技能を活かすための仕事を発掘する営業力が弱い場合が多いですね。私もその一人なんです。よいものをよいと認めてもらうこと。仕事につながる。技能士は『よいもの』というメッセージを自分の代わりに顧客に届けてくれます。技能グランプリでの優勝はさらに大きな効果があります。」という。

技能レベルが高い技能者は、職人としての技能を高め、よりよいものを世に出していくという「作る」能力は非常に高いものがあるが、その作ったものを「認知してもらい、買ってもらう」能力は必ずしも高くない場合が多い。技能者として使える時間の総量は限られる中で、技能を磨くためにほとんどの時間を使い、営業活動にまで時間が及ばない場合が多いのであろう。技能検定の合格は、技能者本人に代わって技能レベルを証明することで、このハンデを補ってくれる。



卒業写真の撮影風景

地域密着で事業を展開し続けたい

尾上氏に、今後の展望を聞いた。「この仕事は、全国展開することはできません。地域密着型でなければならないと思っています。人が生まれてから亡くなるまで、人生そのものを鏡のように映す写真を撮り続けること、そしてできるだけよいものとして残し続けるためには、地域の人たち、その生活、風土、文化・歴史など、地域のことを熟知していなければなりません。だからこそ地域密着でやりたいのです。」

尾上氏は、このような思いでこれからも地域の方々の写真を撮り続けて行く。